

公益財団法人国土地理協会 第 14 回学術研究助成

オーストラリアの環境教育としてのシティズンシップ教育

～ESD 教育を中心に～

研究代表者 酒井 喜八郎 南九州大学人間発達学部  
子ども教育学科

## はじめに

本研究は、オーストラリアのシティズンシップ教育としての環境教育について、特にESDを中心にメルボルンで調査し考察することを目的していた。しかし、さらに、2008年メルボルン宣言以降のナショナル・カリキュラムの新社会科HASS (Humanities and Social Sciences、以下HASS) の内容分析、そして最終的には「オーストラリアの地理教育、グローバル教育、EfS教育をシティズンシップ教育の視点から考察し、4年間にわたるものとなった。

1年目(2015)は、オーストラリアのESD(オーストラリアではEfS: Educational for Sustainability)としての環境教育の動向と特質を明らかにした。環境教育の事例として、メルボルンのモナシュ大学や郊外の小学校を実際に訪問し授業を参観し、CERES環境公園を調査した。また、小学校などで子どもたちのグリーンチームなどの主体的な環境への取り組みがあることもわかった。その結果、オーストラリアでは新しいナショナル・カリキュラムのもとでEfSを重視したシティズンシップ教育が行われていることが明らかとなった。

そこで、2年目(2016)～3年目(2017)は、2008年のメルボルン宣言以降、オーストラリアで新しく作成されたナショナル・カリキュラムのもとでの新社会科HASSのカリキュラムの分析を行った。またカリキュラムの内容だけでなく実際の授業で活用されるワークシートを分析し、異文化理解が知識としてだけでなくスキルの獲得を目指していることを明らかにした。

4年目(2018)は、これまでのまとめとして、オーストラリアにおける地理教育、グローバル教育、EfS (ESD) 教育とのそれぞれの特質とその関連をシティズンシップ教育の視点から明らかにした。

5年目(2019)は、2018年2月に参観したシドニーのX小学校での社会科「ニューサウスウェールズ植民地での連邦化に賛成か反対か？」の授業を参観し考察している<sup>1)</sup>。

本研究の成果は、以下の5点である。

第1に、オーストラリアのメルボルンでは、EfS教育として、環境教育が盛んであり、廃棄物の還元の授業やCERES環境公園など屋外での学習を重視していた。また、近隣の中学校合同での生徒による環境学習発表会や、小学校でのグリーンチームなどの主体的な学校での取り組みも見られた。

第2に、オーストラリアでは、2008年のメルボルン宣言以来、教養のある行動的な市民を育成するため新しくナショナル・カリキュラムが作成され、地理、歴史、経済、公民とシティズンシップの4つのストランドをもつ社会科HASSが実施されている。(ただし、ナショナル・カリキュラムの浸透度は州により異なる。ストランドの1つである地理では、EfS (Education for Sustainability) や先住民の内容も組み込まれており、自分たちの身近な環境からオーストラリアに関連した国々等グローバルな視点から空間軸と時間軸から社会認識を深化させるような内容構成となっている。

第3に、オーストラリアのリソース教材としての地理教科書は、概念理解だけでなくスキルを同時に重視し、コンペテンシー・ベースの内容構成となっている。

第4に、オーストラリアのグローバル教育は各学校の実態に対応して言語・文化の学習を中心に独自のカリキュラムを実施している。その内容は、当初予想していたEfSとしての環境教育だけでなく、多文化教育、平和教育、人権教育など、シティズンシップ教育全てに及んでおり、日本で言えば総合的な学習内容になっている。この理由は、オーストラリアが、近年アジアの移民を受け入れていることや、先住民への配慮等、多文化国家オーストラリアの地理的な位置が重要なポイントであると結論づけられる。オーストラリアのアジアとアフリカへの近接性による交流学習などに特徴がありグローバルなシティズンシップ(市民性)を形成していると言える。

第5に、EfS教育は、コミュニティや地域を大切にしたいシティズンシップ教育を行っている。環境

やエネルギーを考える上で充実した公園や施設、観光教育プログラムなどが存在することや、Aussi などの小学校の EfS に関する様々な取り組みや若者の政治家との会議の取り組み等を通して行動的なシティズンシップを育成している。EfS から〈自然〉や〈社会〉の〈つながり〉を構築しながら環境学習を行っており、オーストラリアの行動的シティズンシップ（市民性）教育の根底には、コモングッツ（公共善）とアリストテレスの思想がある。

わが国でも平成 29 年 3 月、新学習指導要領が告示された。本研究の成果は、知識理解からコンピテンシー・ベースを目指すわが国の小中学校社会科地理教育においても多くの示唆が得られる。今後さらに、日本とオーストラリアの比較教育研究をしていくことが課題である。

本研究助成による主な研究成果（論文・研究発表等）は、以下のとおりである。

- ・酒井喜八郎（2015）「オーストラリアの ESD としての環境教育」『地理教育研究』全国地理教育学会 No. 16, pp. 25-30.
- ・酒井喜八郎（2017）「オーストラリアの新社会科 HASS の動向と特質—ナショナル・カリキュラムとクイーンズランド州の事例の分析から—」『教育方法学研究』日本教育方法学会 No. 43, pp. 1-12.
- ・酒井喜八郎（2018）「オーストラリアの地理教育・グローバル教育・EfS 教育を考える—シティズンシップ教育の視点から—」『南九州大学研究集録』No. 49, pp. 1-10.

次に、それぞれの年度の 3 つの論文要旨と論文内容を示す。

## I <2015 論文要旨>

### 「オーストラリアの ESD としての環境教育」

本研究は、ESD 教育を中心にオーストラリアのシドニー、ブリスベンなどで環境教育がどのように行われているか、その動向と特質を明らかにし、わが国の環境教育やシティズンシップ教育への示唆を得ることを目的とした。研究仮説として、オーストラリアは豊かな大自然を利用した ESD 教育、グローバルな視点からの教育、アジアの視点からのシティズンシップ教育の実践が行われていると考えられる。この仮説を現地でのフィールドワークや授業観察、インタビューをもとに検証した。ビクトリア州の環境教育について、ビクトリア州のカリキュラムとしての AUSVELS の分析や、(1)Ceres 環境公園、(2)C 小学校の「廃棄物の分解」（表 1：授業案）やグリーンチームの活動、(3)WHOLE SCHOOL APPROACH としてのオーストラリアの中学校の発表会の実践事例を分析した。

その結果、オーストラリアは地域の環境施設などへ働きかけており、授業事例においても持続可能な授業を行い、EfS(Education for Sustainability)教育を地域と連携して実践をしていることが明らかとなった。

### <ABSTRACT>

This study is to clarify how environmental education as ESD is going in Melbourne in Australia.

The findings are as follows,

They used to refer Ausvels as state curriculum and the author analyzed the Ceres national park, the environmental lesson: Waste decomposition in C primary school ,and green team activities, the meeting joined with three junior high school as whole school approach are held.

They have school excursion to regional market, or they also have a lesson as Education for Sustainable development.

They practiced EfS education by collaborating with the region.

表 1 「廃棄物の分解」の授業案

<p>(目標)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・何が廃棄物に対して起こっているのか？</li> <li>・この活動においていくつかの種類 of 廃棄物を準備する。</li> </ul>
<p>(授業過程)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・児童たちは実際の破棄物を見る。</li> <li>・素早く分解する物</li> <li>・分解するとき、大変時間がかかる物があることを理解する。</li> <li>・毎日、物質は自然にいろいろな方法で変化する。</li> <li>・科学は対象の記述をする。</li> <li>・多くの廃棄物は分解するまで長い時間がかかる。</li> <li>・私たちの環境は恐ろしい汚染の源になり、環境のダメージがある。</li> <li>・児童たちはどれくらいの時間で分解するか、分解した時間をどのように考えているのかわかるように、あらかじめ準備した時間のものさしに廃棄物を置いていく学習活動を考える。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・キーワード：ゴミ捨て、廃棄、分解</li> </ul>
<p>(テーマと準備)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・どのようにして物が分解するのかの理解、物質によりどのくらい分解時間が異なるのか？</li> <li>・グループごとに児童たちは廃棄物を実際に持ち寄る。(空き缶、ペットボトルなど)</li> </ul>

(※表 1 は、C 小学校の A 教諭の環境の授業案「廃棄物の分解」を筆者訳出。)



(写真 1) ガムツリーで遊ぶ子どもたち



(写真 2) 森で遊ぶ・木の枝でテントをつくろう



(写真 3) 「廃棄物の分解」の授業



(写真 4) Ceres 環境公園 (メルボルン郊外)

## II <2017 論文要旨>

「オーストラリアのシティズンシップ教科としての HASS の動向と特質—ナショナル・カリキュラムとクイーンズランド州とビクトリア州の事例の分析から—」

The Trend and Characteristics of HASS as citizenship education subject in Australia

-Analysis of National Curriculum by ACARA and the case of Queensland state and Victoria state-

オーストラリアでは、2008 年のメルボルン宣言以来、行動的で教養のある民主主義的なコミュニティへ参画し、より広いグローバルな世界を生き抜く市民を育成しようとしてナショナル・カリキュラムが作成された。オーストラリアの社会科教育である HASS ( Humanities and Social Sciences) は、その特質として、①概念の理解、と②スキルを含んでいる。特に、HASS の中の「公民とシティズンシ

ップ」では、例えば、異文化理解についても内容としてだけでなく汎用的能力のスキルの1つとして示されている。具体的には、ナショナル・カリキュラムを教材化または活用しているクイーンズランドの小学校3・4年生を対象にした単元「コミュニティの参加」の「ルール」や「食文化のジレンマ」について考えるワークシートを分析した結果、異文化理解が、問題解決のためのスキルとして位置づけられていることが明らかとなった。一方、ビクトリア州では、ナショナル・カリキュラムを参考にしつつ独自のカリキュラムが活用されているが、授業観察を通して体験による学習、持続可能性が教材と学習内容に常に基本的な骨組みを作り、目標としての〈持続可能性〉だけではなく、単元の構成における内容、方法でも〈持続可能性〉の概念が中心の概念として作用していることが明らかとなった。オーストラリアでは、HASS（以前の SOSE）に EfS やグローバル教育と結びつけて学校全体でアプローチする独自のカリキュラムを実践している学校もある。わが国の場合は、これまで学校の教育目標に、目指す具体的な資質・能力を明示することはあまりなかった。オーストラリアのシティズンシップ教育は資質・能力を重視し、グローバル化をキーワードとする新学習指導要領のもとでのわが国の教科としての社会科のカリキュラムについて考える上でも多くの示唆を与えてくれる。

キーワード：オーストラリアのナショナル・カリキュラム、HASS、汎用的能力、クイーンズランド州、異文化理解

## <ABSTRACT>

National Curriculum in Australia includes not only conceptual understanding but also skill. In Australia, since Melbourne declaration (2008), National Curriculum has been designed year by year. The aim of which is to grow up active, informed citizen and citizen to be able to participate in community, nation, and global society. In Queensland, they will teach National Curriculum or implemented by 2020. The author analyzed the worksheet made by Queensland in civic and citizenship education. As a result Intercultural understanding is treated as skill for problem-solving about food dilemma in community. HASS (Humanities and Social Sciences) consists of 4 strands such as history, geography, civics and citizenship, economy and business. HASS is practiced by some school with related to Global education or EfS education. In Victoria, they emphasize on sustainability which include not goal but the content of entire curriculum. HASS suggests a lot to scholars and practitioner in Japan because that New Course of Study emphasized on general capability enacted by Ministry of Education in 2017. What important is to consider about content and skill of social studies as subject to make curriculum in order to grow the students citizenship..

Keywords: Australia National Curriculum, HASS, general capability, Melbourne Declaration, Civics and citizenship

## 1 オーストラリアの新社会科としての HASS

### (1) 新社会科としての HASS

2017 年度は、新社会科 HASS について分析し、論文（酒井、2018）にまとめたので詳しくはそちらを参照されたい。ここでは、その主な内容として、オーストラリアの新社会科 HASS (Humanities and Social Sciences) はどのような原理と構造になっているのか概観。HASS は、社会、文化、環境、経済と政治の文脈での人間の行動との相互作用の学習である。HASS は、歴史と現代に焦点を当てる。各々の教科や副ストランドにおける学びを通して、生徒たちは知識と理解、探究とスキルを発達させる。オーストラリアのナショナル・カリキュラムにおける HASS の学習領域は、4つのストランドで構成されている。就学前教育段階から6年または7年生の HASS と、7年～10年生からの分化した〈歴史〉、〈地理〉、〈公民とシティズンシップ〉、〈経済とビジネス〉である。

クイーンズランド州教育訓練省 Rouen Marcia へのインタビューによれば、HASS は、それまで教えられてきた SOSE (Studies of Society and Environment) や HSIE (The Human Society and its Environment) から、ナショナル・カリキュラムの HASS に徐々に変わってきている。HASS として、7～10年生対象で歴史と地理が7割を占める探究的授業を実施している。この中に、「公民とシティ

表1 HASS の概念の理解とスキル

(オーストラリアのナショナル・カリキュラムにおけるHASSを紹介したクイーンズランド州教育省作成のフライヤーを筆者訳出して作成)

概念の理解			
歴史	地理	経済とビジネス	公民とシティズンシップ
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ソースとエビデンス</li> <li>・継続と変化</li> <li>・原因と結果</li> <li>・パースペクティブ</li> <li>・エンパシー</li> <li>・意義</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・場所</li> <li>・空間</li> <li>・環境</li> <li>・相互作用</li> <li>・サステナビリティ</li> <li>・変化</li> <li>・スケール</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・資源割り当てと選択肢</li> <li>・ビジネス環境</li> <li>・消費者と金融</li> <li>・リテラシー</li> <li>・仕事と仕事の未来</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・政府と民主主義</li> <li>・法律と市民</li> <li>・シティズンシップ</li> <li>・多様性とアイデンティティ</li> </ul>
スキル			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・時間軸、用語と概念</li> <li>・歴史的問いとリサーチ</li> <li>・分析とソースの活用</li> <li>・パースペクティブと解釈</li> <li>・説明とコミュニケーション</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観察、問いと計画</li> <li>・収集、記録</li> <li>・リプレゼンティング</li> <li>・解釈、分析、結論</li> <li>・コミュニケーション</li> <li>・振り返り</li> <li>・反応</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問いとリサーチ</li> <li>・解釈と分析</li> <li>・経済的理由付け</li> <li>・意志決定と応用</li> <li>・コミュニケーションと振り返り</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問いとリサーチ</li> <li>・分析、総合、解釈</li> <li>・問題解決と意志決定</li> <li>・コミュニケーションと振り返り</li> </ul>

「シティズンシップ」というストランドがあり、新しく 2015 年から導入された。この背景には、2008 年のメルボルン宣言が影響して、ラッド政権の時、各州で分権化していたオーストラリアでナショナル・カリキュラム作成の動きが出てきたのであるが、なぜ現在まで長い年月を要したのだろうか。この問いに対して、ACARA<sup>2)</sup>の HASS カリキュラム・スペシャリストの Mark McAndrew へのインタビューで、学者や当事者の会議により慎重に時間をかけて作成されたためであり、ナショナル・カリキュラムが完成するまでは、後述するように以前のカリキュラムがまだ各州で活用されている地域があり浸透度が異なり、中学校、小学校の順に改訂されていくということであった。

表1のように、HASS では地理、歴史、経済とビジネス、公民とシティズンシップの4つのそれぞれの内容ごとに、獲得させたい概念とスキルが、それぞれの特色に合わせて明示されている。

例えば、〈サステナビリティ〉という EfS の概念が、地理の概念の中にある一方、〈多様性とアイデンティティ〉が、地理ではなく公民とシティズンシップの中にあることは、ナショナル・カリキュラムが異文化理解をスキルとしてとらえていると考えることができる。

## (2) オーストラリアのナショナル・カリキュラムにおける HASS の内容の概要

表2は F (Foundation) 就学前教育段階から 10 年生までの HASS の内容の概要である。

表2を概観すると、HASS は、対象をオーストラリア社会としており縦軸に、「私たちはだれか」、「だれが私たちの以前に来たか」というアイデンティティの問いから始まり、〈社会形成〉、〈伝統と価値〉、〈社会と経済〉、〈時間と変化〉、〈知覚と関連〉、〈社会への責任〉、〈参加〉、〈意志決定〉という流れになっており、横軸に、歴史、地理、公民とシティズンシップ、経済とビジネスの4つのストランドがありマトリックスになっており、段階を踏んで、多文化社会オーストラリアのシティズンシップを育成する内容構成になっている。前述の ACARA の Mark McAndrew によれば、「HASS では 2015 年に公民とシティズンシップというストランドが備えられたが、それ以前は、オーストラリア全体の公民とシティズンシップは存在せず、それぞれの州が独自のカリキュラムを作成していた。例えばニューサウスウェールズ州のカリキュラムでは歴史と地理のシラバスの一部として教えられていた。他の州は全くそのような内容はなかった」という。つまり、研究対象地域のクイーンズランド州では、公民とシティズンシップというストランドはこれまでなく、地理と歴史の SOSE が教えられていた。しかし現在全ての州で公民とシティズンシップが重視され、クイーンズランド州は、ニューサウスウェールズ州やビクトリア州と比べてオーストラリアのナショナル・カリキュラムと全く差異はなく、浸透度が高い。一方、ニューサウスウェールズ州では、HSIE を教え、歴史や地理からシティズンシップを育成しており、ナショナル・カリキュラムの浸透度がまだ低い。ナショナル・カリキュラムへの対応は州や学校で異なり地域差がある。新社会科 HASS は、就学前教育段階から 6 年生まで 2014 年のオーストラリアのカリキュラムのレビューに続いて相互関連型科目として

表2 HASSの就学前から10年生までの鍵理念と科目と副ストランドの例解  
F-10 Humanities and Social Sciences: Key ideas ? Subject/sub-strand illustrations

(ACARAによるHASSカリキュラムより筆者作成)

[http://docs.acara.edu.au/resources/F-10\\_HASS\\_Key\\_ideas\\_-\\_Subject\\_sub-strand\\_illustrations.pdf](http://docs.acara.edu.au/resources/F-10_HASS_Key_ideas_-_Subject_sub-strand_illustrations.pdf)

キーアイデア	科目・副ストランド			
	歴史	地理	公民とシティズンシップ	経済とビジネス
私たちはだれか、だれが私たちの以前にきたか、社会を形成してきた伝統と価値  (抽出した概念) 社会形成、 伝統と価値	<ul style="list-style-type: none"> <li>家族、地方、オーストラリアの歴史；お祝いと記念</li> <li>アボリジナルとトレス諸島の人々の歴史と文化の長年</li> <li>古代ギリシアと古代ローマの遺産</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>場所の編成に関する文化の影響と表現</li> <li>アボリジナルとトレス諸島の人々の国や場所への特別な結びつき</li> <li>社会を形成することにおける人々の環境の世界的見地の役割</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>多様性に対するアイデンティティや態度を形成する社会メディアの影響</li> <li>オーストラリアシティズンシップのシェアされた価値</li> <li>オーストラリアの政治システムの埋め込まれた価値(英米の影響とキリスト教の遺産)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人々のアイデンティティの意識に対する仕事の貢献</li> <li>オーストラリア経済の特徴の定義としての「市場システム」</li> <li>消費者と金融の選択の影響</li> </ul>
どのようにして社会と経済が操作されどのようにしてそれらは時間を超えて変化していくのか  (抽出した概念) 社会と経済、 時間と変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>古代社会と彼らの遺産の社会構造</li> <li>社会における重要な時代のインパクト(産業革命、ルネサンス、科学革命、発見の時代、イギリスの帝国主義、ナショナリズムとグローバル化、オーストラリアの民主主義の発展)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人類の環境の改変</li> <li>人類のウェルビーイングと持続可能な将来に対する計画を改善する政府と非政府組織の役割</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>オーストラリアにおける3つのレベルの政府の操作とオーストラリアの法律システム</li> <li>オーストラリアの自立政府の発展</li> <li>どのようにして政府は社会や経済の変化に反応するか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>オーストラリアで市場を操作する手段としての政府の影響</li> <li>オーストラリア経済の異なったセクターの移動の重要性</li> <li>どのようにして社会は現在と未来で変化する需要と供給に対して有限の資源を活用するか</li> </ul>
人々や場所、アイデアとイベントが知覚され結びつく方法  (抽出した概念) 知覚と関連	<ul style="list-style-type: none"> <li>最初の漂流民の到着の異なった見解と植民地の存在</li> <li>例えば第1次世界大戦と第2次世界大戦と冷戦の間の原因とその関係</li> <li>オーストラリアの文化のグローバルな影響</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人々の場所の知覚やこれらがどのように異なった場所への結びつきに影響しているか</li> <li>どのようにして人間と自然のシステムは結びつき相互依存しているか</li> <li>オーストラリアのそれぞれの場所が世界中を横切つてどのように他の場所と結びついているか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>社会の中でどのようにグループがお互いに知覚し、関連するか</li> <li>オーストラリアのアイデンティティに関するグローバルな結びつきと移動の影響</li> <li>オーストラリア人の権利とお互いへの責任とオーストラリアの国際的な義務</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>オーストラリア経済のパフォーマンスと、どのようにして、これが異なったグループによって知覚されるか</li> <li>どのようにしてグローバル経済の参加者たちは相互依存するか</li> <li>起業家たちやビジネスが成功する異なった方法</li> </ul>
どのようにして人々は社会に責任を持つ練習をし、社会に参加し、良識ある意志決定をしていくのか  (抽出した概念) 社会への責任、参加、 意思決定	<ul style="list-style-type: none"> <li>女性、子ども、アボリジナル、トレス海峡諸島の人々や他のグループにおけるオーストラリアの権利の発展</li> <li>オーストラリアの人権と環境キャンペーンにおける人々の参加</li> <li>オーストラリアの発展への個人やグループの貢献と達成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>場所の生命力を高めるために使用される方略</li> <li>持続性と環境についての世界の見解とどのようにそれらは表現されているか</li> <li>オーストラリアの都市の将来の計画と維持</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>選挙と政府の代表制の役割</li> <li>例えば社会的、文化的、政治的、宗教的なグループのように市民生活でのグループの参加</li> <li>意志決定や民主主義のプロセスにおけるアクティブと良識のあるシティズンシップの重要性</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>職場の雇用者と従業員の職場での責任</li> <li>どのようにして個人やビジネスは、短期、長期の金融目標を達成するための計画をするのか</li> <li>資源の他に採るべき活用について良識のある決定をする手段としての機会費用(opportunity cost)の概念</li> </ul>

作成された。それは内部でつながった4つの副ストランドである歴史、地理、公民とシティズンシップ、経済とビジネスでできている。このレビュー以前には、これらは4つに分離した科目であった。これらが1つの科目に統合され、再編された。この理由については、「カリキュラムにおける内容の複雑さを引き下げようとするために試みられた」ということである。歴史、地理、公民とシティズンシップ、経済とビジネスは中学校（7年生から10年生）では分化した科目である。

### (3) HASSの考察

表2のようにHASSの構造は、「私たちはどこから来たか」から始まっており、移民の移動、市民の形成、最終段階では、オーストラリアの政治、経済へと内容が深化する構成になっていることがわかる。

表3は、公民とシティズンシップ教育の学年ごとの内容構成である。小学校3・4年生からコミュニティに参加することを学習し、コミュニティに起こる問題からルールについて考える。5・6年生では、民主主義に参加すること、7・8年生では法律や議会のシステムについて学び、9・10年生では、持続可能なオーストラリアの民主主義社会について学び、考える内容になっている。

以上のように系統的に、各学年で段階を追ってシティズンシップを育成する内容構成になっていることが読み取れ、最終的には、法律や政治における民主主義のシステムや、経済とビジネスで機会費用の概念や起業家について学ぶことが重視されていることも注目したい。

表3 公民とシティズンシップ教育の学年ごとの内容構成 (筆者訳出して作成)

C2C units for Years 3-10	Unit 1	Unit 2
Years 3-4	私のコミュニティに参加すること	地方のコミュニティに帰属することと貢献すること
Years 5-6	オーストラリアの民主主義に参加すること	オーストラリアの民主主義におけるシティズンシップを形成する影響を開拓すること
Years 7-8	オーストラリアの法律的・政治的システムがどのように市民を守るかを開拓すること	オーストラリアの民主主義におけるシティズンシップを形成する影響を開拓すること
Years 9-10	オーストラリアの法律的・政治的システムが変化を可能にするか吟味すること	持続可能な民主主義を維持すること

一方、この論文では、取りあげていないが、本報告では、HASSの地理についても述べておく。

**地理**は、就学前段階から小6までは、分かれておらずHASSの1つのストランドとなっている。その構造は社会科学の同心円拡大に基づいている。そして、7年生から10年生で、地理が教科として分化し、生徒たちに、私たちの世界を形成している場所の特性について調査し、分析し説明するような機会を準備する、と記述されている。表4-1のように、生徒たちは、彼ら自身や身近な環境、彼らの家、町、地域、さらに、国、グローバルな地域など調べ始める。また小3はオーストラリアの州や準州、アボリジニーやトレス諸島の地域、小4はアフリカや南アメリカ、小5は欧米、小6はアジアの国々やその結びつきについて学ぶ内容構成になっている。

表4-1 地理の学年ごとの内容構成 (筆者訳出して作成)

	HASSの主なトピック	学習内容
就学前	私の個人の世界	地理の観点、場所の位置、簡単な地図の特徴 人々が住み属する場所、家族、なぜ場所が重要か アボリジナルとトレス諸島の人々
1年生	私の成果は過去と異なり、どのように未来に変化するのか	自然、維持、建設する場所の特徴、位置、どのように変化しケアするか、気候と季節、アボリジナルとトレス諸島の人々を含む異なった文化の集団 場所での活動や位置の理由
2年生	多様なコミュニティと場所と人々の貢献	地理区分とオーストラリアの位置 場所は人々に名付けられた地球の表面の部分である。いかに多様なスケールで定義されるか。 アボリジナルやトレス諸島の人々と特別な結びつきを維持する方法。 世界を横断するオーストラリアの人々と他の場所の人々との結びつき。人々が訪れる目的、距離、アクセス、頻度の影響。
3年生	多様なコミュニティと場所と人々がする貢献	オーストラリアの州、準州、アボリジニー及びトレス諸島の地域。オーストラリアの自然と人間の両方の主要な場所。オーストラリアの隣国の位置とそれらの場所の多様な特性。世界の主な気候類型と異なった場所の気候との間の類似性と相異性。居住タイプによる場所の間の類似性と多様性。人口学的特性、そこに住んでいる人々の生活、と人々の場所の認知。
4年生	どのように人々、場所と環境が、過去や現在、相互作用しているか	アフリカと南アメリカの主な特徴と、オーストラリアと関連する主な国々の位置。動物や人々にとって自然の植生を含む環境の重要性。アボリジニーとトレス諸島の人々が地域・場所に対して持っている管理の責任、およびそれが持続可能性についての見解にどのように影響するか。天然資源と廃棄物の使用と管理、およびこれを持続可能な方法で行うためのさまざまな見解。
5年生	オーストラリアのコミュニティー過去、現在、と可能な将来	ヨーロッパ、北米の場所の環境特性に関する人々の影響やオーストラリアと関係のある主な国々の位置。オーストラリアの場所の環境特性に関するアボリジニーとトレス諸島を含む人々の影響。場所の位置と特性、とその中の空間の維持に関する環境と人間の影響。環境やコミュニティに対する山火事や洪水の影響、と人々がどのように対応するか。
6年生	オーストラリアの過去、現在と、多様な世界の結びつき	アジア地域の地理的多様性とオーストラリアに関連した主な国々の位置。世界中の国々の経済的、人口学的、社会的特性の差異。先住民を含む世界の文化の多様性。オーストラリアと他の国々との結びつき、と、これらが人々と場所をどのように変えるか。

表 4-2 7年生から10年生の地理の学習内容

学年(中学校)	2つの学習トピック
7年生	世界の水、場所と生命力
8年生	土地改良と風景、変化する国家
9年生	バイオームと食料保障、相互に結びつく地誌
10年生	環境の変化と維持、人類のウェルビーイングの地誌

また、表 4-2 のように、7年生から10年生の地理では、世界の水から、人類のウェルビーイングまで、より深い学びができるように内容構成されている。7年生から10年生に、地理は個別の科目となり、各年ごとに2つのトピックを持つ。

## 2 クイーンズランド州のシティズンシップ教育としての HASS

次に、ナショナル・カリキュラムがオーストラリアの中でよく浸透しており、シティズンシップ教育や主権者教育の盛んなクイーンズランド州の HASS を分析対象として考察する。

### (1) 異文化理解スキルを育成するクイーンズランド州の「公民とシティズンシップ」ワークシートの分析

クイーンズランド州では、HASS の1つのストランドである「公民とシティズンシップ」教育は、具体的にどのように実践されているのだろうか。

汎用的能力の1つである「異文化理解 (Intercultural understanding)」は、オーストラリアのナショナル・カリキュラムにおいて、どのように位置付けられているのだろうか。詳細に見ていこう。

異文化理解は、HASS のみで扱われるのではなく言語・芸術など全ての教科で適用される。オーストラリアのアイデンティティと多様性の重要な概念であるので、歴史や公民とシティズンシップで特に取りあげられる。小学校3、4年生対象の「公民とシティズンシップ」教育のワークシートの事例を、異文化理解スキルをキーワードに分析してみよう。

### (2) ワークシートの考察

まず、ワークシートの冒頭に、Kauri、Mali、と Cici の3人の子どもたちが登場し、公民とシティズンシップの様々なイシュー (民主主義が公正であるべきこと、ルールの重要性、クラス、家族、学校などの多くのコミュニティに属していること) について話し合っているイラストからスタートする。

次に、ワークシートは、パート A からパート D まで4つのパートで構成される。パート A では、「なぜ私たちはルールを作るのか」というテーマで考える。紙飛行機を投げているイラストや整頓さ

表 5 ワークシート「コミュニティへの参加」のルーブリック

The State of Queensland (Department of Education, Training and Employment) 2014 より(筆者訳出)

知識と理解	質問とリサーチ	分析と解釈	コミュニケーション	
・行動的で教養のある市民になるためにアイデアや意見をプレゼンすること ・どのように決定が民主的になされるか (パートA, B, C, D)	・彼らが生きる社会において質問を出す (パートD)	・問題に関する意見をシェアする (パートA, B, C)	・公民とシティズンシップの用語を活用する、アイデアや主張をプレゼンする (パートA, B, C, D)	
・与えられた決定がもっと民主的になされるはずか考えを示す ・どのようにしてルールは問題を解決するかを説明する	・質問を形成する情報を活用する	・見解を発達させるために情報を熟考する	・公民とシティズンシップに関する問題について根拠付けた意見をプレゼンする	A
・民主主義的な意志決定の利益を確認する問題に対応した新しいルールを作り出すこと	・質問を出すとき公民とシティズンシップの用語を活用する		・彼らのアイデアを入念に述べる	B
・どのようにして民主的に決定がなされてきたかを説明する ・ルールの重要性を認識する ・どのようにコミュニティに行動的な市民として参加するか記述する	・彼らが生きる社会に質問を出す	・時事問題に関する彼らの意見をシェアする	・公民とシティズンシップの用語を活用する ・アイデアや意見をプレゼンする	C
・いつ民主的に決定がなされてきたかを認識する ・ルールとは何かを知る	・質問を書く	・問題を記述する	・アイデアをプレゼンする	D
・ルールが存在することを述べる	・意見を書く	・意見を述べる	・意見を構築する	E

れていない本棚やゴミが散らかっている公園のイラストなどが掲載されている。図を順に見ながら、これらの問題を解決するポジティブなルールを考え書き込むようになっている。また、パート B は、<セクション1>と<セクション2>で構成され、「どのように決定が民主的になされるか」というテーマで考え、民主的に決定するためには、公正で人々を巻きこむことが大切であることを学ぶ。個人のルールからグループのルールというように、段階を踏まえながら、最終的に、学校というコミュニティへの参加のルールについて自分だけでなく、他の生徒の立場からも考えさせる内容構成になっている。さらに、横軸に、知識と理解、質問とリサーチ、分析と解釈、コミュニケーションという項目があり、縦軸に、上位の A 段階から下位の E 段階までマトリックスになっており、ループリックが詳細に構成されている（表 5）。

### (3) 学習課題「ディナージレンマ」

表 6 は、クイーンズランド州によって作成され、パート C に位置づけられた「ディナージレンマ」というワークシートのプリントの事例である。このように多文化社会のコミュニティの中で、子どもたちがどのように異文化理解スキルを活用して問題解決していくかが問われている。さらに学習を振り返るためのワークシートが準備されており、表 7 のような異文化問題を振り返り Y チャートを活用しながら省察する内容構成になっている。

表 6 ディナージレンマ：ワークシート（前半）

デモクラシー学校のバンドは課題がある。課題とは、ディナーを決めることができないことである。これまでは季節の終わりのパーティはふつうフレッドの「魚カフェ」だったが、フレッドが今年引退したので、生徒たちは、違う食べる場所を考えなければならない。簡単に聞こえるが、多くのディスカッションの後、彼らは最適の場所に未だ同意できないでいる。多くの音楽家は、ヘルシーで新鮮な食べ物を欲するので「寿司センセーション」を好む。他は、ピザがパーティに最適というが、ピザレストランには同意できない。生徒たちの多くは、「イタリアンピザシャーク」に行きたい。他は、「ピザクラブ」を好む。唯一の他の選択肢は、「ミッキーのバーガーバー」であった。しかしミッキーはベジタリアンのための食べ物を作らない。メンバーに 2 人ベジタリアンがいる。4 つの選択肢があるが、バンドのメンバーは同意しない。注意深くメニューを読むにも関わらず、同意できず、数人の生徒は怒り出している。この問題は、バンドが楽曲を歌い、音楽を楽しむことに戻ることができるようにすぐに解決される必要がある。

表 7 ワークシート（後半）

・どのようにして決定が民主的になされるか。ディナージレンマの話から Y チャートに情報を記録しよう。  
 A 直接的に述べられている事実を書きなさい。直接的ではないが暗示されている考えを書きなさい。  
 B このグループについて想像してみよう。この話のどの事実があなたにとって重要であるか。この情報について考え、このグループがどこへ夕食に行ったらよいかについてあなたの考えはどうか。  
 C この問題を民主的に解決する最善の方法についてあなたの考えを書きなさい。

### (4) ディナージレンマの考察

このワークシートの学習課題「ディナージレンマ」は、食事の習慣が異なるオーストラリアの若者がどのようにして食事の場所を決定するかを考えるものである。バンドのメンバーがベジタリアン（菜食主義者）もいるため、なかなかバンドのパーティを行うレストランが決定できないという内容である。汎用的能力の 1 つとしての異文化理解のスキルは、次の 3 つの内容が組み込まれている。

- ① 文化を認識し尊敬の気持ちを発達させること
- ② 他者と相互作用し、他者をエンパシーすること
- ③ 異文化体験を振り返り、責任感を持つこと

特に①のように、文化の認識・尊敬だけでなく、②他者との相互作用と他者をエンパシーすることとあり、エンパシーが動詞として使われて問題解決のスキルとして強調され、③のように異文化体験を振り返り責任感を持つとあり、自己の異文化体験も活用する点にも注目したい。

ディナージレンマの学習問題は、異なる食文化の文脈の中で、他者の見方を明らかにする認知的側

面と、他者の行為や置かれた状況に気を遣う情意的側面の両方から問題を解決する必要があることを示している。エンパシーについては、アメリカの歴史教育から、相互の議論に基づく生徒主体の探究型授業が、複数の異なる意見に触れることを可能にすること、またはジレンマ状況にあった人物を取り上げると効果的という原田（2016）<sup>3)</sup>の指摘がある。資質・能力の育成に関わって、オーストラリアでも、エンパシーを位置づけることが、公民とシティズンシップ教育で取り組まれていることがわかる。異文化理解は、学習内容ではなく問題解決のための汎用的能力の1つとして考えられている。このディナージレンマは、多様な食習慣を持つバンドメンバーとの相互作用により、共感しつつもジレンマがあるというオーストラリアの多文化社会だからこそ起こりうる問題について考える。そして、他者の意見を認識し、他者の立場を感情移入し、エンパシーを持ちながらより良い解決策を探ろうとする流れとなっている。また、ワークシートの中のYチャートは、3つの領域に指定された視点に対応する情報を書く情報ツールの1つで、分けて書くことで問題に対する考えを構築し易くする手立てが組み込まれている。さらに、評価基準も汎用的能力の視点から、横軸は〈知識と理解〉、〈質問とリサーチ〉、〈分析と解釈〉、〈コミュニケーション〉という4つの項目があり、縦軸がそれに対応してマトリックスになりA～Eまで5段階別に考えられている。例えば、コミュニケーションの評価基準では、「公民とシティズンシップ」の 이슈に、根拠付けた意見を述べることができることがA評価で、これに対して、E評価は、意見を書く、にとどまる。このように、オーストラリア国内の多文化社会の中で生活する上で起こりうる具体的なジレンマ事例について意志決定するプロセスを通して、汎用的能力の1つとして異文化理解を資質・能力のスキルとして活用する授業が志向されている。

この社会科授業のワークシートからも、オーストラリアが、多文化を理解するだけでなく、異文化理解スキルを活用し問題解決できるグローバルな人材の育成を目指していることがわかる。こうして、ナショナル・カリキュラムでは、就学前教育段階から10年生までに獲得すべき異文化理解のスキルをレベルごとに詳細に記述し、連続的な学び（Learning Continuum）を目指している<sup>4)</sup>。さらに学習到達度を示す評価基準も前述のように横軸の観点と縦軸の尺度からなるマトリックスの表となっており、明確にルーブリックが示されている。

以上のように、クイーンズランド州の事例を具体的に分析した結果、ナショナル・カリキュラムに対応した新社会科 HASS は、指導計画から展開・評価までコンピテンシー・ベースでマクロからミクロまで授業が構成されていることが明らかとなった。

### 3 新社会科 HASS の特質

新社会科 HASS の研究で明らかになったことは、次の3点である。

第1に、オーストラリアの新社会科 HASS は、①知識・概念の理解、と②汎用的能力（スキル）の育成を、同時に目標としている。HASS は、2014年のオーストラリアのカリキュラムのレビューに続いて相互関連型科目として就学前教育段階から6年生まで作成された。それは4つの副ストランドである歴史、地理、公民とシティズンシップ、経済とビジネスで構成される。カリキュラムにおける内容の複雑さを引き下げようとするために1つの科目に統合され再編された（HASS の7年生～10年生は分化した科目である）。各州の HASS の浸透度は異なり、ニューサウスウェールズ州のようにまだ HSIE が教えられている公立学校もある。しかしながら、州ごとに地域差はあるものの、どの州でもシティズンシップ（市民性）の育成は重視されている。

第2に、オーストラリアのクイーンズランド州はナショナル・カリキュラムの浸透度が高く、学校州議会やカリキュラムを活用し教師の裁量で教材化して活用している。ナショナル・カリキュラムを尊重しつつ学校および教師の裁量でカリキュラムを実際のかつ主体的にマネジメントができる。

第3に、クイーンズランド州の3・4年生の HASS の1つのストランドである「公民とシティズン

シップ」のカリキュラムや実際に使用されているワークシートを分析した結果、オーストラリア社会で日常起こりうる多文化国家ならではのジレンマ問題を、生徒がその文脈や状況において解決する手段として主体的に判断するように構成されており、異文化理解が汎用的能力の1つのスキルとして組み込まれている。また、この汎用的能力の1つである異文化理解スキルは、全ての教科で取り扱われ、ルーブリックによる一貫した評価が組み込まれている。他のスキルも同様である。本報告では、さらに HASS の地理の学年ごとの内容構成についても分析し考察した。

以上のように、わが国の新学習指導要領の社会科教育の目標である「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を育成する」に対して、オーストラリアの新社会科 HASS からは、①教科横断的で柔軟な教師裁量のカリキュラム・マネジメント、②グローバル化する国際社会に主体的に生きるための汎用的スキルの定義とそのスキルを育成するカリキュラムと多文化社会に起こりうるジレンマ問題教材、および、③明確なマトリックスによる評価基準の策定等、の豊かな示唆を得ることができると考える。

### Ⅲ <2018 論文要旨>

「オーストラリアの地理教育、グローバル教育、EfS 教育を考えるーシティズンシップ教育の視点からー」

In Australia, How do Geography Education, Global Education, and EfS Education foster citizenship?

キーワード：オーストラリア、グローバル教育、EfS 教育、シティズンシップ教育、コモングッツ

オーストラリアの地理教育、グローバル教育、EfS 教育をシティズンシップ育成の視点から分析考察した。その結果、以下の3点が明らかになった。

第1に、オーストラリアの小・中学校の地理教科書は、概念理解だけでなくスキルを重視し、コンペテンシー・ベースの内容構成となっている。

第2に、オーストラリアのグローバル教育は各学校ごとの実態に対応して言語・文化の学習を中心に独自のカリキュラムを実施している。その内容は、当初予想していた EfS としての環境教育だけでなく、多文化教育、平和教育、人権教育などシティズンシップ教育全てに及んでいる。この理由は、オーストラリアが近年アジアの移民を受け入れていることや先住民への配慮、多文化国家オーストラリアの地理的な位置が重要なポイントであると結論づけられる。オーストラリアのアジアとアフリカへの近接性から、グローバルなシティズンシップを形成していると言える。

第3に、EfS 教育は、コミュニティや地域を大切にしたいアウトリーチの参加型の教育を行っている。環境やエネルギーを考える上で充実した公園や施設、観光教育プログラムなどが存在することや、Aussi(Australian Sustainable Schools Initiative.)などの EfS に関する様々な取り組みや若者の政治家との会議の取り組みなど、行動的なシティズンシップを育成し、EfS を中心に<自然>や<社会>と<つながり>を構築しながら環境学習に取り組んでいる。

オーストラリアの EfS 教育は Connection (つながり) がキーワードであり強調点である。オーストラリアの行動的シティズンシップ教育の根底には、コモングッツとアリストテレスの思想がある。

#### <ABSTRACT>

The purpose of this paper is to clarify the characteristics of geography education, global education, and Education for Sustainability(EfS education) from the perspective of citizenship education.

As a result of this analysis, my findings are as follows ;

First of all, global education in Australia mainly used the original curriculum of each school but centered it on language and culture.

Its content includes not only environmental education, as the author initially believed, but also multi-cultural education, peace education, and human rights education, which extends through entire citizenship education curriculum.

Importantly, I concluded that the reason for this is Australia's geographical location, its recent acceptance of many immigrants from Asia, and as well as its recognition of Indigenous Australians, etc.

The geographic accessibility of Australia to Asia and Africa has shaped the country's global citizenship education.

Secondly, Australia also developed its citizenship education program based on community and regional discussions.

In Melbourne, many environmental parks, facilities, tourism education programs, and primary school events, feature group discussions between young generation and politicians. In other words, they place an emphasis on the connection between nature and society from the perspective from EfS.

Thirdly, Australia's emphasis on local and global citizenship for students was influenced by the Declaration of Melbourne in 2008. The foundation of citizenship education in Australia is a way of thinking about common good first espoused by Aristotle in ancient Greece.

Key word : Australia, geography education, global education, Education for sustainability, Citizenship education

2018年度は、オーストラリアのEfSについて、主に①小学校と中等学校の地理教科書リソースの内容を分析した。また、②モナシュ大学のLibby Tudball他による全豪のグローバル教育の事例集から主な8事例を抽出し、その動向と特質を明らかにした。ここでは、酒井(2018)から中心となる部分について述べる。

## 1 オーストラリアの地理教科書リソースの内容分析

### (1) オーストラリアの小学校地理教科書の内容分析

オーストラリアの小学校地理教科書の中には市民性を育成するために、身近な生活からグローバルな 이슈を取り扱うリソース教材もある。この小学校地理教科書は、Stephen Scoffham (Visiting Reader in Sustainability and Education Canterbury Christ Church University) というイギリスの地理学者によって執筆されている<sup>5)</sup>。オーストラリアでは、イギリスの地理教科書が使用されることも珍しくなく、リソース教材としてどの教科書を活用すればよいかという規制はない。この教科書は身近な社会問題を扱いながら、コンピテンシー・ベースに作成されている。地球から水、気候など自然地理だけでなく、オーストラリアはもちろんシンガポールなどアジアの人文地理や世界で起こる問題も取りあげられている。例えば、小学校6年の地理では、惑星地球、水、気候、居住、仕事と旅行、環境、場所の7つのイシューがあり、ヨーロッパ、南アメリカ、シンガポールも対象地域として取り扱われていた。オーストラリアのナショナル・カリキュラムではアジアについて必須領域(プライオリティ)として学ぶようになっている。具体的に人々にとって大切な「水」の単位について、この教科書の記述内容を分析してみよう。表1～表4が、「水」の単元の2頁内に一覧できるように記述されている。

表1 「単元：世界の水」本文の内容 (表1～表4：筆者訳出して作成)

<p>水を飲むこと</p> <p>&lt;レッスン1:水、至る所にある水&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・世界に水は充分あるのか?</li><li>・世界にはたくさんの量の水がある。しかしながら、その水のほとんどは、塩味の海水としてであり、飲み水に使用できない。私たちの新鮮な水資源は、川、湖、地下水である。新鮮な水は、工業用、農業用のみならず私たちの生活にとって本質的なものである。世界中には、人口増加による水の需要が起こっている。また人々はたくさんの機械を買うのもっと水を使用する。これは水が資源として欠乏することを意味している。雨がほとんど降らない密集した地域では、この問題はもっと悪化する。</li></ul>
--

表2 キーワード

<ul style="list-style-type: none"> <li>・水たまり・ポンプステーション・貯水池・資源・水の仕事・井戸</li> </ul>
--

表3 データバンク

<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界の食料を成長させるために、1秒あたり世界の2億キロリットルの水が必要である。</li> <li>・真水の70%が氷として南極に存在する。</li> </ul>
---

表4 イシュー

<ul style="list-style-type: none"> <li>・水のしずくが落ちている蛇口は、1か月に700リットル以上の水を浪費している。</li> <li>・水道メーターは、水を節約するために、イギリスでは、多くの家で設置されてきた。</li> <li>・世界中で、人々は、水洗トイレよりもモバイル電話を持っている。</li> </ul>
---

このデータバンクの他、マップワーク（地図作業）のコーナーがあり、これらの資料をもとに、様々なイシュー（問題）について考える内容構成となっている。

水に関する単元のイシューでは、水道の問題点について①から③の3つが挙げられている。①では、イギリスでは、平均1ヶ月に700リットルの水を浪費していること、②では、水道メーターが水の節約のために設置されていること、③では、水洗トイレよりもモバイル電話の所有率の方が世界全体で高いという興味深い問題が取りあげられている。つまり、表1の本文だけでなく、さらに表2のキーワード、表3のデータバンクや地図化のコラムがあり、これらをもとに、表4に示したイシュー（問題）を考える内容構成となっており、それぞれが関連し、知識理解だけでなくスキルを同時に重視し獲得させようとしていることが読み取れる。オーストラリアの小学校地理教科書の分析をした結果、次のようなことがわかる。

第1に、イギリスの地理学者が書いた教科書が使われており、表1から表4の内容を見てわかるように、単元名、本文の説明文、キーワードのコラム、データバンクのコラム、問題のコラム、というように、系統的に教科書が知識理解とスキルを同時に獲得できるように記述されている。特にこの社会科教科書は新社会科 HASS (Humanities and Social Sciences) によくリンクし、ナショナルカリキュラムに対応した内容構成となっており示唆に富む。

第2に、調査のコラムでは、地図で位置を確認したり、表現したりする頁があり、様々なアクティビティが用意されている。

第3に、イシュー（問題）がトピックとして取り扱われており、イシューを調査活動や地図化などの様々なアクティビティを行いながら考える活動をとおして、知識とスキルを同時に身に付ける内容構成になっている。

## (2) オーストラリアの中学校地理教科書（リソース教材）の内容分析

次の表5は、オーストラリアのニューサウスウェールズ州の中学校リソース教材としての地理教科書（第9学年と10学年用）<sup>6)</sup>の単元内容を分析考察したものである（オーストラリアでは教科書というより、リソース教材として活用される）。

表5 中学校教科書の分析 P社 （パートAの部分を筆者訳出して作成）

単元名 単元の内容 <パートA>第1章：地理の探究とスキル 1-1 地形図を分析すること・・・地形図、地形図を分析すること、景観を読むこと 1-2 地形図マップで作業すること 方位、勾配 1-3 流れ図 1-4 写真の解釈：農業 1-5 人口ピラミッド・・・人口ピラミッドの活用、人口ピラミッドの解釈 ・オーストラリアとインドの人口ピラミッド、学習活動
---

Pearson 社は、オーストラリアの本屋で販売されており、シェアが高く、内容は系統地理である。この中学校教科書（リソース教材）の著者の Dr. Grant Kleeman はオーストラリアの先導的な地理教育者であり、Australian Geography Teachers' Association Inc. の会長をしている。教科書はパート A の「地理の探究とスキル」と、パート B～E、オンラインチャプターのそれぞれの単元内容で構成されている。

パート A では、地理の基本的なツールとスキルを学ぶ。地形図の読み取りや流れ図、産業としての農業の解釈の仕方、人口ピラミッドの活用と解釈、その応用として、オーストラリアとインドの人口ピラミッドの比較を行っている。さらに、人口ピラミッドについて表 6 のような発展課題がある。

表 6 発展課題（筆者訳出して作成、下線は筆者による）

<p><b>知識と理解</b></p> <p>1 人口ピラミッドの意味するものは何か述べよ。</p> <p><b>地理のスキル</b></p> <p>2 図 1.5.2 と 1.5.3 を学習し、次の課題を完成させなさい。</p> <p>a オーストラリアの 1995 年と 2015 年の 15 歳以下の年齢の人口比率を見積もりなさい。</p> <p>b インドの 1995 年と 2015 年の 15 歳以下の年齢の人口比率を見積もりなさい。</p> <p>c オーストラリアの 2015 年の 15 歳以下の年齢の人口比率を見積もりなさい。</p> <p>d インドの 2015 年の 15 歳以下の年齢の人口比率を見積もりなさい。</p> <p>e オーストラリアの 1995 年と 2015 年の 64 歳以上の年齢の人口比率を見積もりなさい。</p> <p>f オーストラリアの 2015 年の 64 歳以上の年齢の人口比率を見積もりなさい。</p> <p>g インドの 2015 年の 64 歳以上の年齢の人口比率を見積もりなさい。</p> <p>h 図 1.5.1 を活用し、1995 年の人口遷移の段階によりオーストラリアとインドの人口構造を分類しなさい。</p> <p>3 2050 年の人口投影を活用し、オーストラリアとインドの人口ピラミッドを作りなさい。2015 年の 2 つの国の人口構造とともに、15 歳人口と 64 歳以上の人口を比較しなさい。</p> <p>4 調査活動：<u>アフリカの発展途上国のどこかの国を選択して、アメリカの資料センサスを活用して、人口ピラミッド(1995、2015、2050)を自分で作成し、オーストラリアと比較考察しなさい。</u></p>
--

表 6 のように、人口ピラミッドについて、解釈やスキルを学ぶだけでなく、実際に調査活動の課題があり、アフリカのどこかの国を選択して、人口ピラミッドを、アメリカの資料センサスを活用して自分で作成し、オーストラリアと比較考察する課題が出されており、コンピテンシー・ベースの内容構成であることがわかる。つまり課題の対象地域はオーストラリアだけではなくアフリカもあり、活用する資料はアメリカの統計資料というように、グローバルに思考をめぐらす内容構成となっている。また、IPCC の政策について考えさせる課題もあり、総じて高度な内容となっている。IPCC : Intergovernmental Panel on Climate Change (気候変動に関する政府間パネル) のことで、国際的な専門家で構成される地球温暖化の研究のための政府間機構である。

パート B は、表 7 のような単元で構成されている。

プロジェクトの事例もやはり、オーストラリアではなく、アフリカのタンザニア・パンガニ川の流域総合的水資源管理が取りあげられており、気候変動・適応の考え方が見受けられ、高度な内容を取り扱っている。このように中学校の地理教科書は、EfS の視点から世界の川の水資源管理の問題などにも言及され幅広い内容となっている。また、農業のグローバルパターンについての記述もあり、中学校の地理教科書は、EfS の視点からの自然地理の記述が目立つ。オーストラリアの新社会科 HASS (Humanities and Social Sciences) は、①知識・概念の理解②スキルを同時に目標としているが、第 9-10 学年では表 7 に示すように、ニューサウスウェールズ州の中学校地理教科書（リソース教材）

は、応用的で、HASS のナショナルカリキュラムに準拠しながら、コンピテンシー・ベースで、系統地理の内容構成で、ESD の視点が組み込まれていた。以上のように、小・中学校の地理教科書の内容から地理教育は、概念理解とスキルの獲得、と探究的な発展学習を通してシティズンシップの育成を目指していることがわかる。

表 7 中学校地理教科書の内容構成

(パート B の部分を筆者訳出して作成)

<b>単元名</b>	<b>持続可能なバイオーム</b>
第 2 章	バイオーム(気候的特性によって区分された地域に生息する生物群集の単位)
第 3 章	食べ物と繊維生産
第 4 章	食料生産への挑戦
第 5 章	食物の保障

(パート C の部分を筆者訳出して作成)

<b>単元名</b>	<b>変化する場所</b>
第 6 章	都市化
第 7 章	人口移動
第 8 章	オーストラリアの都市の未来

(パート D の部分を筆者訳出して作成)

<b>単元名</b>	<b>環境の変化と維持</b>
第 9 章	環境
第 10 章	森林
第 11 章	内水

(パート E の部分を筆者訳出して作成)

<b>単元名</b>	<b>人類のウェルビーイング</b>
第 12 章	人類のウェルビーイングにおける空間的なバリエーション
第 13 章	人類のウェルビーイング：オーストラリア

(オンラインチャプター：筆者訳出して作成)

第 14 章	海岸部の環境
第 15 章	海の環境
第 16 章	人類のウェルビーイング：インド
第 17 章	伸びる課題

## 2 オーストラリアのグローバル教育の主な実践事例

### (1) グローバル教育実践事例の考察

次に、全豪のグローバル教育 *Bright Sparks Leading Lights: Snapshots of Global Education in Australia*<sup>7)</sup> の中から主な実践事例を抽出し、内容を見ていこう。

表 8 のように、8 つのオーストラリアのそれぞれの学校は、①先住民学習、②人権学習や学校全体のアプローチ、③多言語教育、④カンボジアとの交流学习、⑤人権教育、⑥社会正義と国際理解、⑦グローバリズムと相互依存、⑧環境学習と評価、にそれぞれ特徴がある。各学校の取り組みを見てみると、学校が位置する地域性や児童生徒の実態を生かして、環境学習だけでなく、人権学習や社会正義の学習など多岐にわたる総合的な実践をしていることがわかる。また、特色のある実践として、先住民学習や、オーストラリアのアジアやアフリカに近いという地理的位置の近接性を生かしてユニークな交流学习などを行っている。日本の総合学習に近いグローバル教育は、子どもたちにグローバルな

認識を涵養し、グローバルシティズンシップを育成するのに役立っていると考えられる。

表8 オーストラリアのグローバル教育の著名校の実践事例

(Tudball & Stirling (2011) *Bright Sparks Leading Lights: Snapshots of Global Education in Australia* 74p.

より筆者訳出して作成)

<p><b>① YIRARA COLLEGE、NOTHERN TERRITORY州(先住民学習に特徴)</b></p> <p>(実践内容) ヤラカレッジでは、「先住民のコミュニティ」とともに学ぶ総合学習が特色で、「ミニチュアのグローバル村: アイデンティティと調和」というテーマで実践を行っている。メルボルンを州都とするビクトリア州は多くの移民や難民を受け入れてきた地域であり、多文化化した社会に対応する教育がなされてきた。</p>
<p><b>② INGLE FARM PRIMARY SCHOOL、SOUTH AUSTRALIA州(人権学習やグローバル教育の学校全体のアプローチに特徴)</b></p> <p>(実践内容) イングルファーム小学校は次のように紹介されている。「私たちは高い質のアカデミックな学び、個人の生徒をケアし、サポートする。南オーストラリアでもユニークな特質があり、3つのセクターで構成されている。小学校のセクターは初等学校7年生までを受け入れる。集中英語プログラムがオーストラリアへ来たばかりの生徒に教えられる。2年までのコミュニケーション障害の受け入れと、知的障害の3年から7年までの生徒たちを世話する特別支援教育セクターがある。私たちは、教育プログラム、全ての国家、サービス、多文化コミュニティに対してコミットする。私たちは、私たちの文化、言語、体験の多様性が強み、高揚、知識の源であると信じている。イングルファーム小学校は、アデレードの北部郊外に位置し、現代的に構造化されたカリキュラムの源である。現代的な、ダイナミックで、先進的な教育実践をしている。私たちの生徒の多文化の本質は、学校内のコミュニティのセンスをほどよく高めることを可能にする。</p>
<p><b>③ ADELAIDE HIGH SCHOOL、SOUTH AUSTRALIA州(多言語教育に特徴)</b></p> <p>(実践内容) 人権教育、グローバル教育に対して学校全体のアプローチがある。フランス語、イタリア語、ドイツ語、現代ギリシャ語、中国語、日本語、スペイン語などを学習する。43のエスニックグループがある。</p>
<p><b>④ SWAN EDUCATION DISTRICT、WESTERN AUSTRALIA州(カンボジアとの交流)</b></p> <p>(実践内容) パースの北東、都市エリアに位置する。2006年にカンボジア政府との覚え書きを発展させる。カンボジアの最も貧困地域である Kampong Speu 県の Kong Pisei を校長が訪問し姉妹校の協定を結んだ後、より遠い学校も参加するようになった。</p>
<p><b>⑤ MT ST MICHAELS COLLEGE、QUEENSLAND州(人権教育)</b></p> <p>ブリスベン南西部郊外に位置する。強い社会正義と平和教育を重視している。あらゆる面で人間の尊厳を重視しお互いに協力する。グローバル教育の総合学習や協同カリキュラムなどを実施している。</p> <p>(実践内容) 1908年創立の南オーストラリアで最古の高等学校で、州の言語教育の特別指定校となっている。フランス語、イタリア語、ドイツ語、現代ギリシア語、日本語、スペイン語などがカリキュラムに入っている。英語が話せない背景を持つ学生が全体の60%、43のエスニックグループがいる。カリキュラムの範囲内で、グローバルな見識を持つことが学校の長期目標である。</p>
<p><b>⑥ ST LEONARDS COLLEGE、VICTORIA州</b></p> <p>(実践内容) メルボルンに2つのキャンパスを持つ。強い社会正義と国際理解教育、地方のビクトリアカリキュラムだけでなく、ディプロマプログラムを持つ。プログラムは、世界中の国際的な見識や理解を広げるのに計画されている。</p>
<p><b>⑦ GRAYS POINT PUBLIC SCHOOL、NEW SOUTH WALES州</b></p> <p>(実践内容) GRAYS POINT PUBLIC SCHOOL は、シドニー郊外南部にある。ロイヤルナショナルパークに隣接しており良い環境にある。一つの人々、一つの世界をハイライトにグローバリズムや相互依存について学んでいる。</p>
<p><b>⑧ DON COLLEGE、TASMANIA 州(環境学習と評価に特徴)</b></p> <p>(実践内容: コミュニティの行動を導く価値) DON COLLEGE はタスマニア州の DON 貯水池の中の森の中にある。「寛容、理解、尊敬、アイデンティティ」という価値に基礎を置いている。SOSE (Studies of Society &amp; Environment: 社会と環境学習) がグローバルカリキュラムを発展させるために選ばれている。SOSE をクイーンズランドのカリキュラムアセスメントとレポートフレームワークを活用して実施している。「知識と理解、調査、話し合い、参加、リフレクション(省察)、地理・歴史・観光・宗教・オーストラリア・アジア・太平洋学習、哲学の学習を実施しており、グローバルな視点が強調されている。宗教と哲学の学習は、タイ(仏教)とインド(ヒンズー教)の姉妹校とスカイプで結んで授業を行っている。また、ホワイトボードを使用して相互に意見交換をしている。アジア教育基金助成を受けて、タイ、インド、中国、日本と姉妹校の関係を築いている。Civics and Citizenship 教育は、オーストラリアカリキュラムのねらいに沿ってシークエンスが準備される。</p>

## (2) ESA : Education Service Australia (オーストラリア教育サービス) での聞き取り

2018年7月12日、午前9時、ESA(オーストラリア教育サービス)のLen Vanessa氏を訪問し、ビクトリア州の教育の動向について1時間にわたり話を聴いた。インタビューによれば、ビクトリア州では、特に、最近、言語・文化教育が重視されている。特に、日本語やイタリア語など10カ国語から各学校で1カ国語選択して学ぶ言語文化のプロジェクトが発足する予定があるという。

見世(2013)は、ビクトリア州が、歴史的に多く移民を受け入れてきたことからマルチカルチュラルグローバルシティズンシップ教育が盛んであると述べている<sup>8)</sup>。しかしながら、現在、ビクトリア州ではグローバル学習がやや下火になってきており、一方で言語と文化・歴史学習を強調するプロジェクトを立ち上げようとしている。また、新社会科HASS(Humanities and Social Sciences)はクロスカリキュラムを含み、優先的に学ぶ領域(ナショナルプライオリティ)があり、Aboriginal Studiesでは先住民のアボリジニーの文化と歴史を学ぶことが強調されている。オーストラリアは、近年先住民や移民に対して寛容な政策をとっている。

## 3 考察

### (1) 地理教育・グローバル教育・EfS教育のそれぞれの特質

これまでの内容分析からオーストラリアの地理教育、グローバル教育とEfS教育は、以下に示す3点が、シティズンシップ育成の原理であり、根底の考え方の特質であると結論づけることができる。

#### ① 概念理解とスキルを同時に目指すリソース教材としての小・中学校地理教科書

第1に、小・中学校の地理教科書の分析から、それぞれの教科書がEfSの視点から概念理解とスキルの育成を同時に目指す内容構成になっていることが明らかになった。これまで日本の学校でも概念理解は行われていたがスキルの育成においては充分ではなかった。資質・能力の育成を、わが国の新学習指導要領は重視しているので、その点で示唆に富む。

#### ② 地域とグローバルシティズンシップの育成

第2に、オーストラリアのグローバル教育は、各学校ごとの実態に対応して言語・文化の学習を中心に独自のカリキュラムを実施している。その内容は、当初予想していたEfSとしての環境教育だけでなく、多文化教育、平和教育、人権教育などのシティズンシップ教育全てに及んでいる。この理由は、オーストラリアでは、近年アジア系移民が増加していることや、先住民への配慮等、多文化国家オーストラリアの地理的な位置が重要なポイントであると考えられる。オーストラリアのアジアとアフリカへの近接性から、グローバルなシティズンシップの形成を目指していると言える。

#### ③ アウトリーチの参加型環境教育プログラム

第3に、EfSの視点から、グローバルシティズンシップを育成する一方で、コミュニティや地域を大切に環境教育としてのシティズンシップ教育を行っている。酒井(2015)で述べたように、メルボルンでは、市場や公共施設に小学生の子どもたちが見学にフィールドワークしているのを温かい目で見守る市民の姿がある。例えば、幼稚園における森への遠足学習、小学校における廃棄物のリサイクルの授業、中学校が連帯して他校の生徒を集めての体験重視の環境学習について実践事例を挙げたが、今回、さらに、メルボルン郊外のCeres公園やフィリップ島のペンギンパレード、ブリスベン郊外のウェットランド自然保護センター、シドニーのパワーハウス博物館など、多くの学校の子どもたちを受け入れており、休日には親子でこれらの施設を訪れる姿が見られた。

このように環境やエネルギーを考える上で充実した公園や施設、観光教育プログラムなどが存在することや、Aussiなどの小学校のEfSに関する様々な取り組みやAYCCなどの若者の政治家との会議もあり、EfSの視点から<自然>や<社会>と<つながり>を構築しながら、環境学習に取り組んでいることがわかる。モナシュ大学のLibby Tudball氏へのインタビューでも、オーストラリアのEfS教育は、自然や社会との< Connection : つながり >がキーワードであることが強調されていた。

## (2) それぞれの教育の根底にあるもの—メルボルン宣言(2008)とコモングッツ(公共善)の思想—

(1)の考察から、オーストラリアは国内のコミュニティや地域の学習を通してのローカルな視野と同時に、アジアの視野、さらにグローバルな視野からの行動的なシティズンシップを育成しようとしている。これは、2008年の国家教育指針であるメルボルン宣言の影響が大きいことがわかる。メルボルン宣言では、オーストラリアすべての若者が①成功した学習者②自信のある創造的な個人③活動的で教養のある市民になることを目指している。そして、オーストラリアのシティズンシップ教育の根底には、コモングッツの考え方がある。2016年にブリスベンで開催されたSCEAA(Social and Citizenship Education Association Australia)会議のテーマは「Common Goods: コモングッツ」であった。「コモングッツ」は「公共善」と訳することができる。なぜ、オーストラリアのシティズンシップ教育は今、「コモングッツ」なのか。「コモングッツ」は「個人の善」よりも「社会全体への公益」を目指すものである。この理由として、オーストラリアには古くアリストテレスの思想が根底にありイギリスの思想と同様の特質があり、これが、行動的シティズンシップを目指す源であるといえる。

## おわりに

これまで見てきたように、オーストラリアのEfS教育のキーワードは、「つながり」である。また、オーストラリアの現在の、地理教育、グローバル教育、EfS教育をシティズンシップ教育の視点から分析すると、「コンピテンシー・ベースの概念理解とスキルの育成」、「行動的シティズンシップ」、「コモングッツ」の3つのキーワードに集約できる。これはわが国の社会科教育関係者にとっても、地理教育、グローバル教育、EfS教育について、①概念理解とスキルの獲得を同時に目指すこと、②カリキュラムや教科書の内容構成、③シティズンシップ教育の視点から考察する重要性など、多くの示唆を与えてくれる。

2015年9月、アジェンダ2030が設定され、ESDをさらに発展させたSDGs(Sustainable Development Goals)は、若い人々の間でも関心が近年ますます高くなってきている。今後は、アジェンダ2030に向けた教育実践が日本でもオーストラリアでも行われていくだろう。さらに、新学習指導要領で資質・能力を目指す日本の教育と、同様にナショナルカリキュラムで21世紀型学力の汎用的能力を目指すオーストラリアの教育のESDやSDGsの研究交流が深まることを願う。

## <注>

1) 1901年という時点で、ニューサウスウェールズ植民地の人々はどのように連邦化に対応したかを図書館やICTで調べ学習を通して話し合うシティズンシップを育成する授業であり、ここではHSIE: Human Society and its Environmentが教えられていた。機会があれば論文化したい。発表は、日本公民教育学会。

2) ACARA: Australian Curriculum Assessment and Reporting Authorityとは、オーストラリアのナショナル・カリキュラム作成の機関のことである。

ACARAによるナショナル・カリキュラムについては以下のホームページを参照のこと。

<https://www.acara.edu.au/curriculum> (2018年3月22日閲覧確認)

ナショナル・カリキュラムの浸透度は地域差があり、ACTやクイーンズランド州が高い(酒井、2018)。

3) 原田智仁(2016)「歴史的エンバシーに着目した参加型学習を: 主権者教育の視点から考える授業デザイン」『社会科教育』明治図書, No. 53, pp. 36-39.

4) 青木麻衣子(2015)「オーストラリアにおける多文化教育—多文化を取り巻く環境とまなざしの変化」『オセアニア教育研究』Vol. 21, pp. 8-21. 連続的な学び(Learning Continuum)については以下のホームページを参照のこと。  
<https://www.australiancurriculum.edu.au/media/1075/general-capabilities-intercultural-understanding-learning-continuum.pdf> (2018年3月22日閲覧確認)

5) Stephen Scoffham(2014) *Primary Geography Pupil Book6 Issues*, Colin Bridge, 64p.

6) Grant Kleeman(2016) *GEOGRAPHY 9+10* NEW SOUTH WALES PEARSON p. 387.

7) Libby Tudball & Lindy Stirling (2011) *Bright Sparks Leading Lights: Snapshots of Global Education in Australia* 74p. オーストラリアのグローバル教育実践事例集。Libby Tudballは、SCEAA(全豪公民とシティズンシップ教育学会)元会長。

8) 見世千賀子(2013)「オーストラリアのシティズンシップ教育がめざすもの」*Voters* No. 12, p19.

(謝辞) 本研究は、国土地理協会の研究助成の成果である。ここに感謝したい。